

共生社会実現のための地域力の指標化

研究調査報告書

2010 年 3 月



(財)ひょうご震災記念 21 世紀研究機構
研究調査本部 共生社会づくり政策研究群

■はじめに

本報告書の体裁は、通常の調査報告書の体裁と異なり、広く県民のみなさまに、直接利用していただくことを念頭においた読み物としての体裁にチャレンジしている。理由はいくつかあるが、研究機構がおこなっている調査研究をより多くのみなさんに知っていただき、その結果を利用していただく必要性に対する危機感が、その最大のものである。そして、研究テーマが「地域力」の可視化であり、視覚的な表現を用いることに向いていたことが、取り組みをあとおしした。

研究機構ではこれまでも、セミナーやシンポジウム開催等を通じた、研究成果の公表に取り組んできた。今回の試みは、研究結果の直接提供を狙った意欲的なものである。このことにより、セミナーやシンポジウムには参加されないみなさんにも、別の形による情報提供がかなうことを願っている。

今後とも、研究機構と県民のみなさんとの距離がさらに近いものになり、地元根差したシンクタンクとして、研究機構をますますご活用いただければ幸いに思う。惜しむらくは、担当者がこの一連の作業に不慣れであり、関係者の多くのご配慮に比して、出来映えがよろしくないことである。

担当研究員：越智祐子

まえがき

国や県がとっている統計には多くの種類があります。これらを活用することで、兵庫県の様子を知ることができます。今回は、ひょうごの地域力のひとつとして「子どもの居場所と、すこやかな育ちに関する指標」について考えてみました。結果を地図に描いてみたので、ご覧ください。

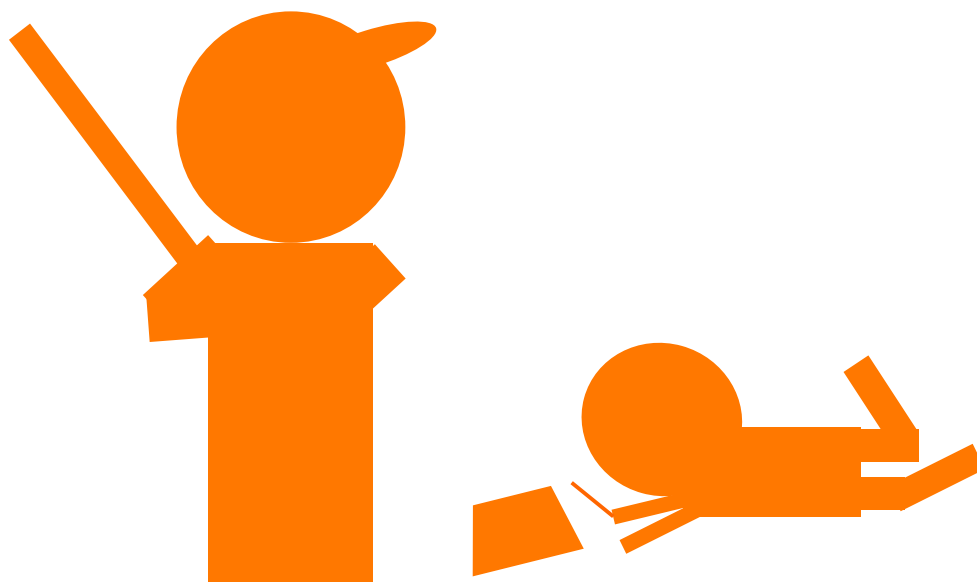
利用したのは、①国勢調査の2000年と2005年の結果と、②2009年実施の県民意識調査の結果、③2009年11月現在の県内の各施設・団体数です。②および③の利用については、兵庫県庁の協力を得ました。また、施設や団体の所在地から地図上の位置を決めるのに、東京大学空間情報科学研究センターから提供されているアドレスマッチングサービスを利用させていただきました。ありがとうございました。

目次

1. 調査研究の目的.....	3
2. 研究の背景.....	5
3. 冒険ひろばに保護者が期待すること	6
4. 方法.....	8
5. 結果.....	10
(1) ひょうごの子どもはどこにいる？	11
(2) 冒険！プレーパーク.....	15
(3) 児童館へ行こう！	16
(4) 楽しく便利、でも危険なこともあるかも・・・な場所.....	17
(5) 子供を対象とした非営利活動.....	18
(6) 全部重ねると、道路網に似てる？	19
(7) 子供にやさしいオトナや環境はどこ？	20
(8) 個別項目でみたときの特徴	22
(9) 非都市部で高い	23
(10) 都市部で高い	29
(11) どちらともいえない	32
6. 分析.....	35
(1) 地域力の、主観部分	35
(2) トータルの地域力	37
7. まとめと提案.....	38

1. 調査研究の目的

調査研究の目的



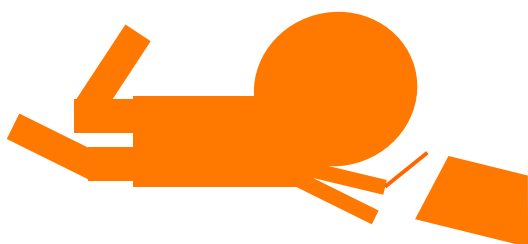
最近、「地域力」ということばをきくことはありませんか？これは、地域社会の実力のようなものが想定されています。施設数といった、客観的に評価できるもののみから地域の潜在力を測るのではなくて、もっと、そこに住んでいる人や、人々のつくりだす関係性に注目しようという概念です。具体的には、地域社会を構成する人々が、どの程度、自律することや連帯することを重んじているか、また実際に、どの程度地域のなかでつながりを持って生活しているか、といったことから考えることが可能です。

このような「地域力」は、**共生社会の実現**のためにとても大切なものであると考えられます。そして、さまざまな分野に特化して考えることができます。たとえば、「要介護高齢者にとっての暮らしやすさ」を考えることができます。その中で特に今回は、ひょうごの地域力のひとつとして「**子どもの居場所と、すこやかな育ちに関する指標**」に注目します。近年、「子どもの居場所」についての議論が活発になってきています。小学生の子どもたちに、放課後をどのように過ごしてもらおうか、ということが、文部科学

省と厚生労働省で具体的に考えられ始めています(放課後子どもプラン <http://www.houkago-plan.go.jp/>)。この報告書では、兵庫県における子どもたちの居場所を確認し、子どもを見守る「地域力指標」を提案して、目に見えるかたちで表現することを目指します。

2. 研究の背景

研究の背景



子どもたちの居場所や遊びについて、保護者はどのように感じているのでしょうか。まず、これまでおこなわれた調査の結果を見てみることにしましょう。

3. 冒険ひろばに保護者が期待すること

冒険ひろばに保護者が期待すること



子どもが安心して遊べる 195人



身体を動かして遊べる 114人



子どもの冒険心を満たす 110人

(327人の複数回答)

※王冠は、<http://www.ke905.jp/gazou/icon/crown/>からお借りしました。

わたしたちは 21 年度、兵庫県の補助事業である「子どもの冒険ひろば」について、参加している子どもたちの保護者のかたに、アンケート調査へのご協力をお願いしました。「子どもの冒険ひろば」とは、プレーリーダーをはじめとする大人の見守りのなかで、「自分の責任で自由に遊ぶ」ことのできる屋外の場所です。アンケートは、県下 19 団体に配布され、回答数は 327 人(有効回収率 27.0%)でした。冒険ひろばに保護者が期待することについて尋ねた結果からは、安心して冒険や外遊びのできる遊び場が期待されていることがわかります。

第一生命経済研究所が、全国の小学生の子どもを持つ母親を対象に 2007 年に実施した調査をみても、回答者の 75%が「子どもが自由に、安全に遊べるような広場や公園」が、子どもの放課後生活に必要だと考えています。子どもたちが安全安心に過ごせる遊び場が求められていると言えるでしょう。その一方で、回答者のほとんどが、自分たちのころに比べて、今の子どもたちは外遊びをする機会が減っていると感じており、さらに、外遊びをもっと評価すべきだと考えています(<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/news/news0808.pdf>)。

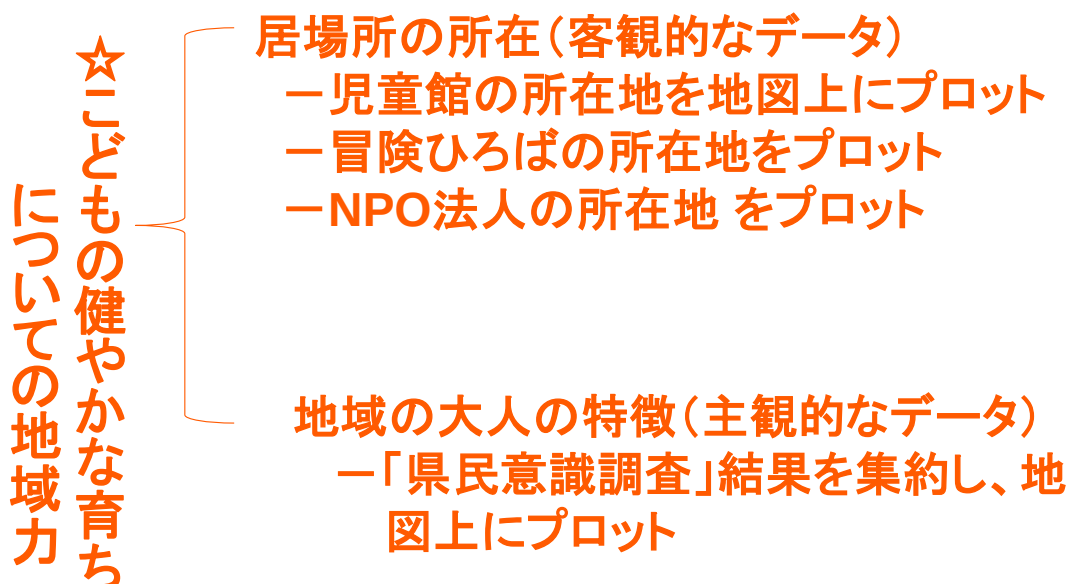
では、子どもたちが安全安心に外遊びを楽しむためには、どのようなことが必要なのでしょう。まず、空間的に、子どもたちが過ごせる場所があること。そして、子どもたちを見守る地

域の雰囲気があることではないでしょうか。もちろん、子どもたちが塾や習い事などで、あまりにも忙しすぎないことも重要な点です。

4. 方法

方法

☆子どもの所在データ(国勢調査の結果)



子どもの健やかな育ちについての地域力を描き出してみることが、この調査研究の目的でした。そこで今回は、図のように、客観的に見ることのできる「数」およびその地理的分布と、人々がどのように感じているかという主観的なものの両方から成り立っているものとして、「地域力」をとらえることにしました。

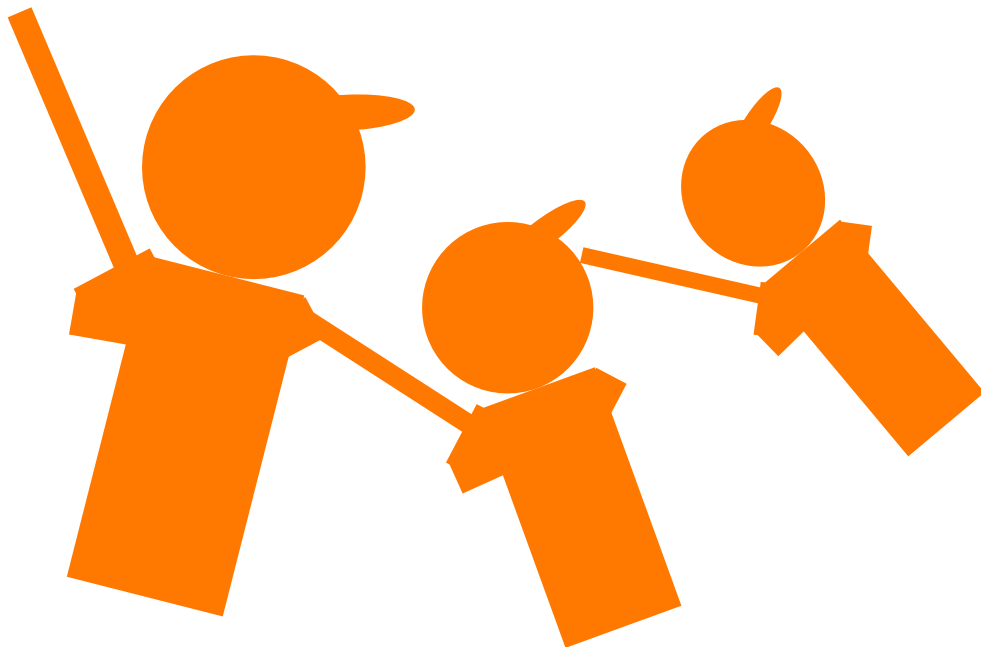
特に取り組んだのは、今回、「地域力」を描き出すのは、県民のみなさんが既に持っている、統計データという財産を活用することによっておこなう、ということです。兵庫県には、たくさんのデータという宝物が眠っています。今回の報告は、このような統計資料を活用したもののひとつだととらえることができます。この方法を採用することで、新しく社会調査を企画することに比べて、より手軽にいろいろな事柄について、検討することが可能になります。今回のように、探索的に指標をつくってみるときには、よい方法だと考えられます。もちろん、お金も節約できます。さらに、使用する項目を入れ替えれば、「子ども」ではなく「大人」あるいは「高齢者」「障害者」についての暮らしやすさについても検討できます。これは、

既存資料を活用することのメリットですが、逆にデメリットは、専用の調査ではないので、ぴったりくる項目が必ずしもいつもあるわけではない、という点です。

なお、この調査研究で「子ども」とは、主として小学生をイメージしています。ただし、国勢調査の結果を利用するにあたっては、0 歳から 15 歳までの年齢層を「子ども」と考えました。

5. 結果

結果



それでは、結果を見ていきましょう。

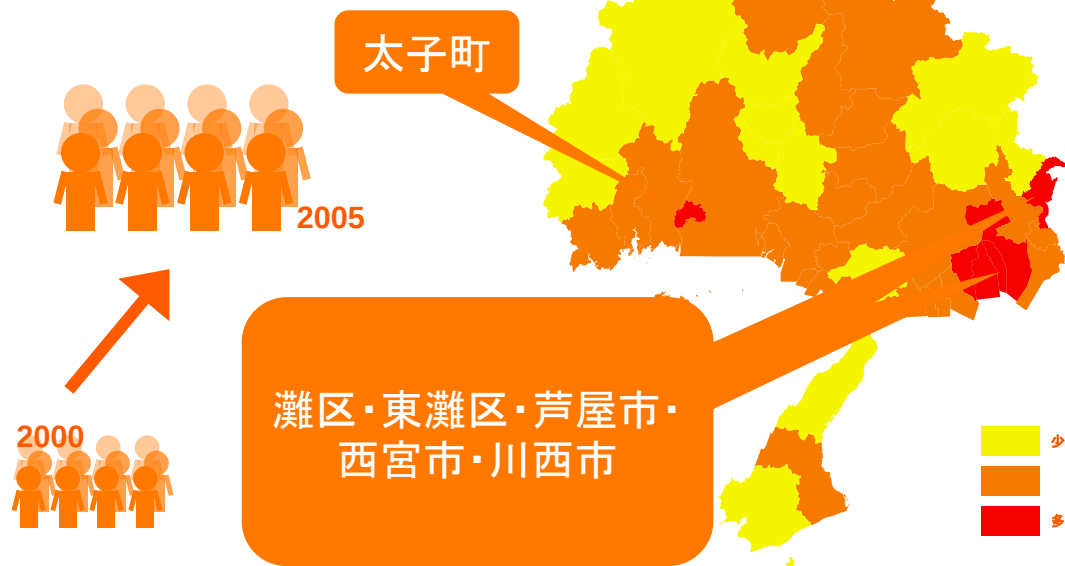
(1) ひょうごの子どもはどこにいる？

ひょうごの子ども
はどこにいる？
～こども数の比較



まず、兵庫県のどのあたりに子どもがたくさんいるのかを確認します。地図を見てください。2005 年の国勢調査の結果を使って、15 歳以下の子どもたちがどこに住んでいるのかを示しています。黄色から赤くなっているにつれ、子どもの数が多くなるように、市町ごと(神戸市は区ごと)に色分けをしました。この地図を見ると、兵庫県の子どもは、阪神北・南地域に集中して住んでいます。なかでもたくさん住んでいるのは、尼崎市、西宮市、それから西へ行って、姫路市です。

ひょうごの子ども はどこにいる？ ～5年間の変化



子どもがどこにたくさんいるのか、今度は2000年の国勢調査実施時の結果と、2005年の結果を比べてみました。市町単位(神戸市は区単位)で、それぞれ2000年調査時の子どもの数を100としたときの、2005年の人数の伸びです。兵庫県全体で、子どもの数は減少していますが、減少の程度には地域差があります。この5年間で、子どもの数が増加したのは、太子町、灘区、東灘区、芦屋市、西宮市と、川西市です。減少が少なかったのは瀬戸内の東西の帯と、県の中央から少し東よりを日本海側へとおる南北の帯になっている市町です。

ひょうごの子ども はどこにいる？ ～子どもの割合



さらに、市町(神戸市は区)の人口に占める、15 歳以下の子どもの割合についてみてみます。この地図は、色が赤ければ赤いほど、住んでいる人たちの中で、15 歳以下の子どもの占める割合が多いまちです。このようなまちは、人口規模からみて小さなまちであったとしても、住民にとっては、子どもたちがたくさんいる、と感じられるまちになっていることでしょう。

結果を示した地図をみると、人口規模の大きかった市町、とくに阪神間では、必ずしも赤いわけではありません。内陸部のほうが、若いまちになっているようです。また、県西部にも赤い帯が見えます。このことは、住宅地の開発と関係があるのかもしれません。

ひとと、ばしと。



子どもが居心地よく過ごすには、居心地のいい場所と、居心地よく感じさせてくれるオトナの両方が必要です。

まず、場所についてみていきましょう。

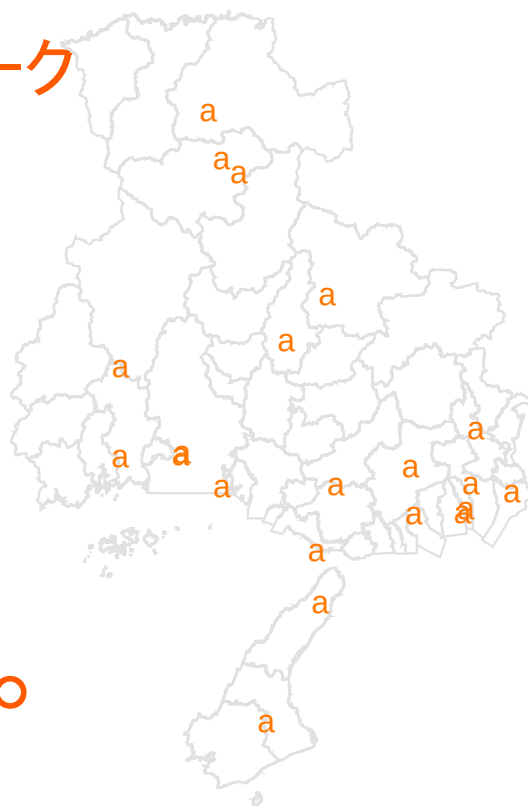
子どもにやさしい場所はどこにある？



(2) 冒険！プレーパーク

冒険！プレーパーク

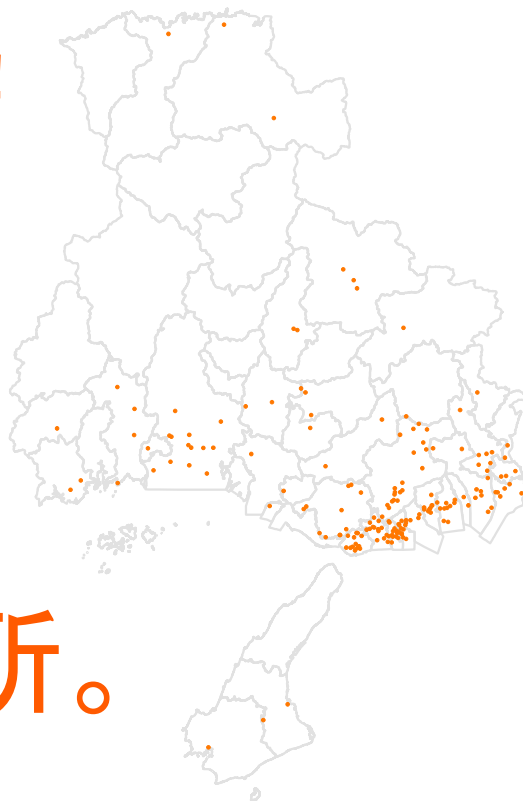
19箇所。



兵庫県には、県の補助事業としておこなわれてきたものだけで、19 箇所のプレーパーク(子どもの冒険ひろば)があります。19 箇所のほかにも、自主的に展開されているものもあります。これらのプレーパークでは、「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーとして、子どもが思いっきり遊べます。訓練を積んだ遊び手で、子どもの遊びを見守るプレーリーダーと呼ばれるオトナもいます。

(3) 児童館へ行こう！

児童館へ行こう！



180箇所。

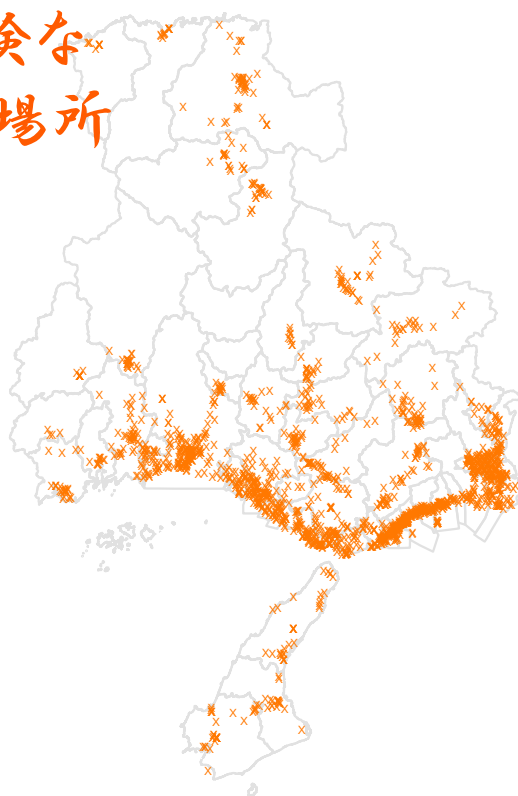
児童館は、子どもたちが、遊んだり本を読んだり、自由に過ごすことのできる場所です。遊びを見守ってくれる専門の大人がいます。市町によって、小地域ごとに児童館をつくっていたり、児童館ではなく、類似の施設が役割を担っていたり、いろいろのようです。あなたのおうちの近くには、児童館がありますか？

宝塚市には、中高生たちが集まりやすい工夫をしていることで全国的に有名な児童館があります。また、多くの児童館で、午前中は赤ちゃんたちが来ているようです。市によっては、今新しく児童館を増やしているところもあります。児童館は、子どもたちの遊びや健やかな育ちについて、一生懸命考えている典型的な場所です。ご自宅の近くに児童館があるなら、それはとてもラッキーです。ぜひ、利用してみてください。

それから、姫路市にある、県立こどもの館は、県における児童館の中心的役割を担っている場所です。こどもの館を中心として、児童館どうしのつながりも増えていっているようです。今後が楽しみです。

(4) 楽しく便利、でも危険なこともあるかも・・・な場所

楽しく便利、でも危険な
こともあるかも・・・な場所

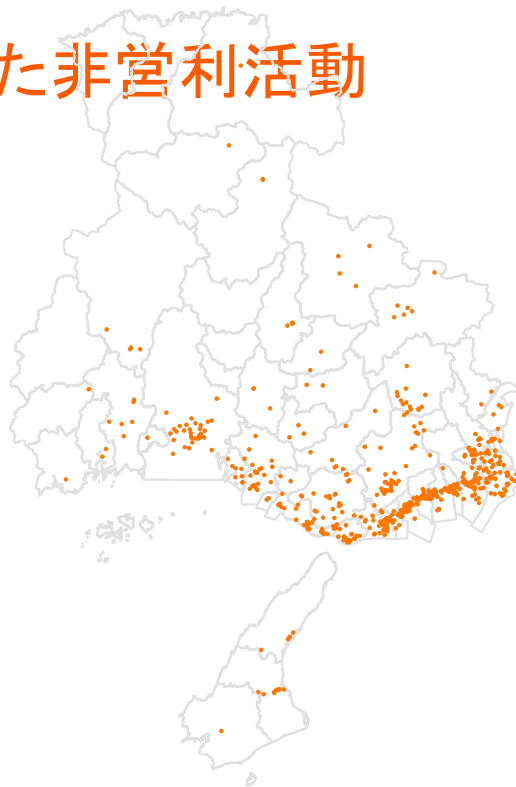


コンビニエンスストア、インターネットカフェ、おもちゃ銃扱い店、カラオケボックスなど。阪神間から瀬戸内沿岸部にかけて、たくさんあります。県東部の内陸部のほうへも、線上に分布しています。これらの場所は、子どもだけが利用するのではなくて、年長の子どもたちや、大人も利用する場所です。プレーパークや児童館では、大人は子どもたちを見守る視点を持っています。しかし、この地図に示したような場所は、多くの人の目があっても、いつも温かいまなざしがあるとは限りません。でもとても魅力のある場所でもあります。コンビニエンスストア前では、夜遅くまで車座になっている中高生を見かけることがあります。本来の目的とは異なっていますが、実際にはある種の居場所になっている場合もあるのですね。そのような子どもたちの姿を見て、恐怖を感じる子どもや大人もいます。できれば、利用するすべての人が安心できるような居場所があるとよいですね。

(5) 子供を対象とした非営利活動

子どもを対象とした非営利活動

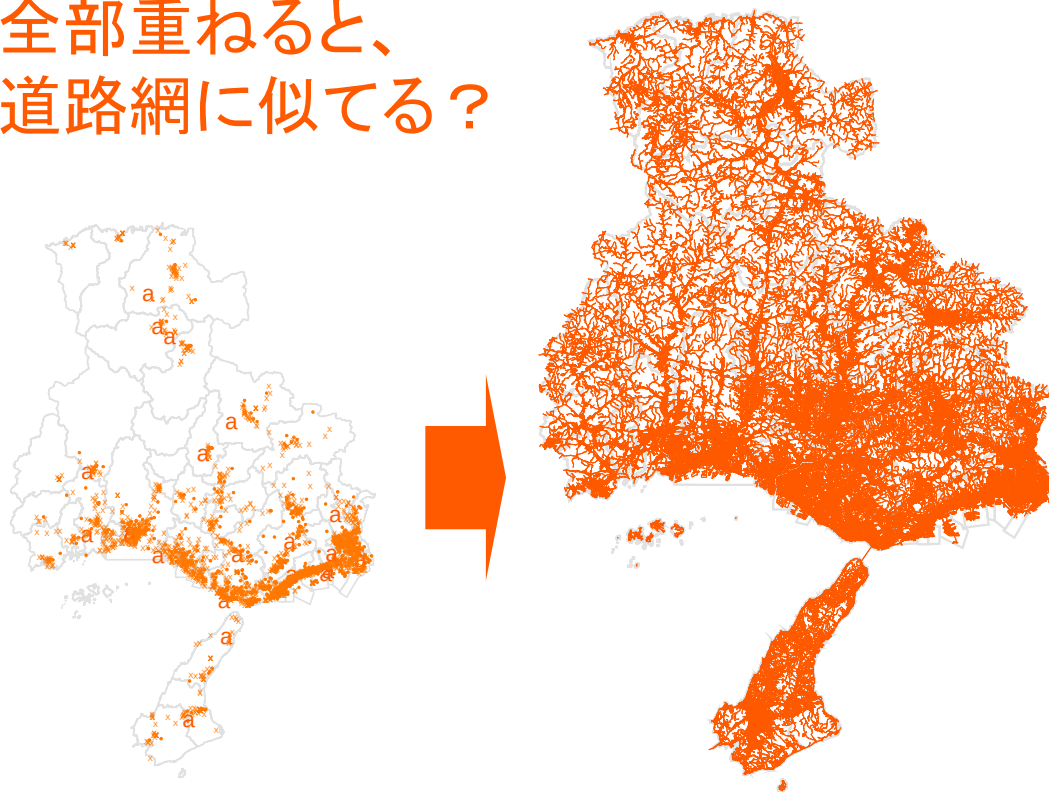
543団体。



子どもを対象とした活動をおこなっているNPO法人は県下で500団体以上あります。事務所の所在地は、地図に示しているようなかたちで分布しています。阪神間と、県の東南部に集中しています。NPOの地理的な分布は、先に見た「ちょっと怖いかもしれない場所」とは異なって、子どもを大切に思って活動してくれる大人がいる場所として考えることもできます。

(6) 全部重ねると、道路網に似てる？

全部重ねると、
道路網に似てる？



左側の地図は、今まで見てきたすべての施設を重ねた図です。瀬戸内臨海部と、阪神間に集中しています。また、内陸部に向けて県東部に縦方向へ、ラインができていようにもみえます。

右側は、県内を走る道路網を表しています。子どもの居場所(たまり場)の分布図(左側の図)と、右側の道路網の図と比べると、濃くなっているところが似ているようです。道路がたくさん走っている場所は人がたくさん住んでいる、都市部だと考えられます。子どもに関する「場所」が多いか少ないかは、都市化の程度と関係があるようです。

また、子どもが現に多く住んでいたたり、増えていたり人口に占める子どもの割合が多いなど、「子どもがたくさんいる」地域に、おおむね対応できているようだといってよいでしょう。これらのことから、子育て期の家族が都市に集中して住んでいること、近年のニュータウン開発にともなって、都市周辺部で子どもが増えていることなども推測できます。

(7) 子供にやさしいオトナや環境はどこ？

子どもにやさしいオトナや環境はどこ？



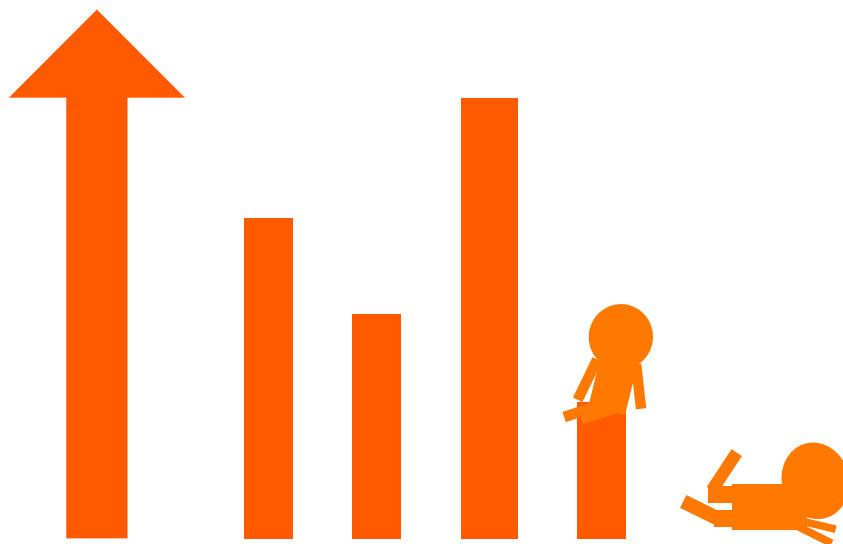
これまでは、客観的なデータから、子どもが気持ちよく過ごせる場所の多い地域がどこなのかをみてきました。たとえば、NPO 団体の所在地を確認することで、子どもに関わる活動をしている大人たちが、所在地周辺にいたことが簡単に推測できます。しかし、NPO 団体が事務所を構えていない地域については、そのような推測をすることができません。NPO 団体が存在しない地域には、子どものことを考えてくれる大人たちは少ないのでしょうか？

このような疑問にこたえるため、ここからは、県民意識調査の質問項目にある自律と協働についての意識、居住地域の安全・安心についての主観などから、ひょうごの「地域力」の主観的な分野について探ります。具体的には、「ゴミの分別やリサイクルに協力しているか」「頼りになる知り合いが近所にいるか」「子育てについて地域で支えあう雰囲気があるか」「地域の行事によく参加するか」「地域に自分の活躍の場があるか」「地域の異なる世代の人と付き合いがあるか」「近所の子どもの名前を何人くらい知っているか」「近所に子どもの遊び場や人々の憩いの場があるか」「地域活動やボランティア活動をしているか」「地域活動やボランティア活動に使ってもいいと思う時間はどのくらいか」「地域活動やボランティア活動に使ってもいいと思う金額はどのくらいか」「夜 9 時以降に住んでいる

地域を安心して歩けるか」「住んでいる地域で登下校時の見守りがおこなわれているか」「住んでいる地域は車の往来を気にせず出歩けるか」「住んでいる地域は、高齢者や障害者にも暮らしやすいと思うか」「住んでいる地域の子どもはのびのびと育っていると思うか」「住んでいる地域はきれいだと思うか」「住んでいる地域に誇りや愛着を感じるか」「体験学習が子どもの成長に役立つと思うか」「開発や公共事業は住民の意見を反映しておこなわれているか」の、計 21 項目です。

(8) 個別項目でみたときの特徴

個別項目でみたときの特徴。



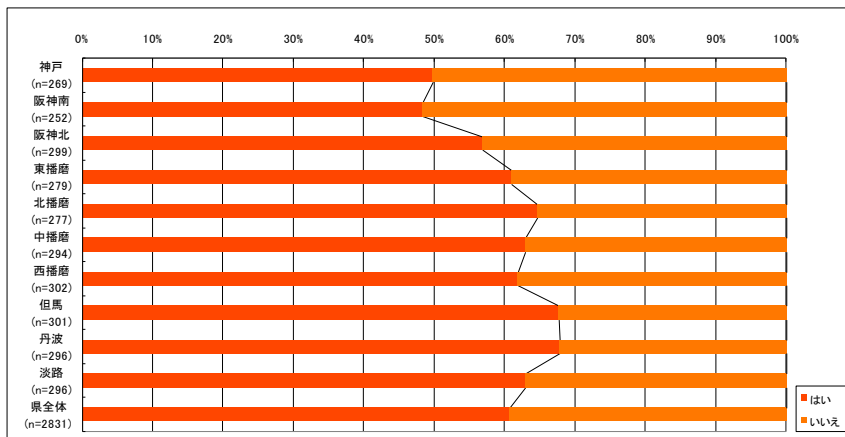
まず、各項目について確認しましょう。兵庫県は、阪神間の地域をはじめとする瀬戸内臨海部の「都市部」と、内陸部から日本海側に至る「非都市部」とにおおざっぱに分類することができます。そこで、各項目の設問に「そう思う」「まあそう思う」と、賛成した人の割合が、都市部で高いもの、非都市部で高いもの、どちらも変わらないもの、の3グループに分けてみました。

(9) 非都市部で高い

非都市部で賛成する人の割合が多かった項目は、「地域の行事によく参加する」をはじめとして、「近所に頼れる知り合いがいる」、「子育てについて地域で支えあう雰囲気がある」、「近所の子どもの名前を知っている」、「地域に自分の活躍の場がある」、「地域の異なる世代の人とつきあいがある」、「地域活動をしている」、「登下校時の見守りがおこなわれている」、「車の往来を気にせず歩ける」、「夜9時以降に地域を安心して歩ける」、「地域の子どもはのびのびと育っている」の11項目でした。これらはおおむね、近隣の人との関係の濃さに関わる項目であると考えられます。

非都市部では、これらの地域における人間関係のストックがあるのだと考えられます。

近所に頼れる知り合いはいますか



一部、播磨圏域で低くなっていますが、近所に頼れる知り合いがいる割合は、非都市部で高くなっています。

子育てについて地域で支えあう雰囲気



一部、播磨圏域で低いところもありますが、おおむね非都市部で賛成する割合が高くなっています。

地域の行事によく参加しますか



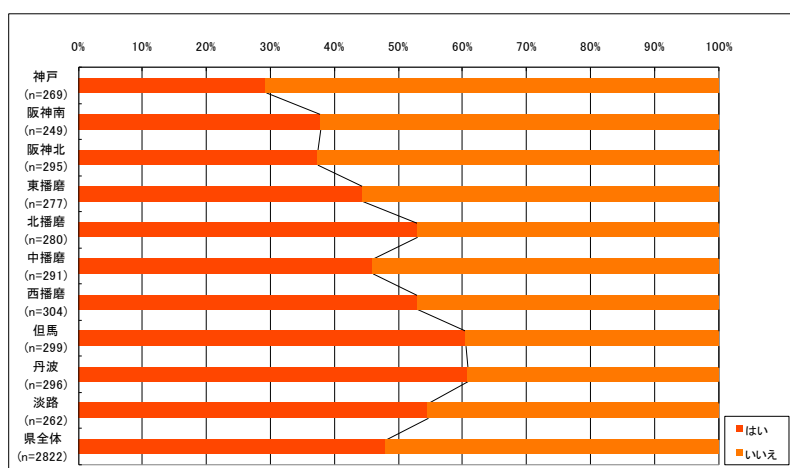
一部、播磨圏域で低いところもありますが、都市部と非都市部で、かなり賛成する割合が異なっています。

地域に自分の活躍の場がありますか



一部、播磨圏域で低いところもありますが、おおむね非都市部で賛成する割合が高くなっています。

地域の異なる世代の人とつきあいがある



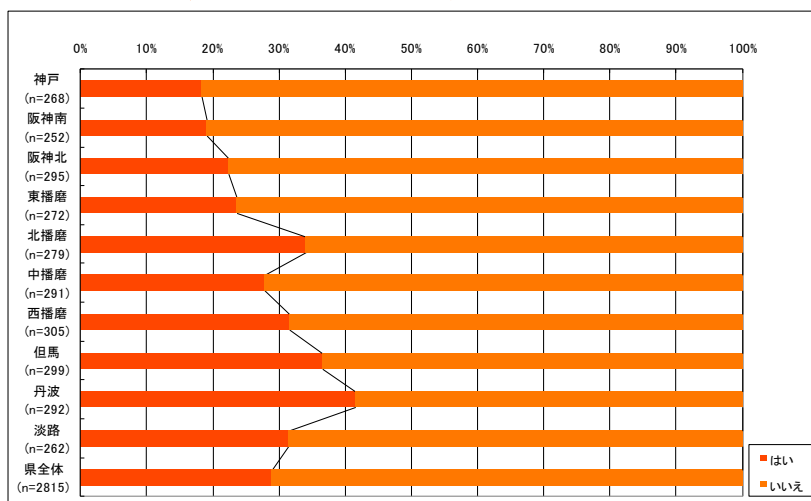
一部、播磨圏域で低いところもありますが、おおむね非都市部で賛成する割合が高くなっています。

近所の子どもの名前を知っている人数



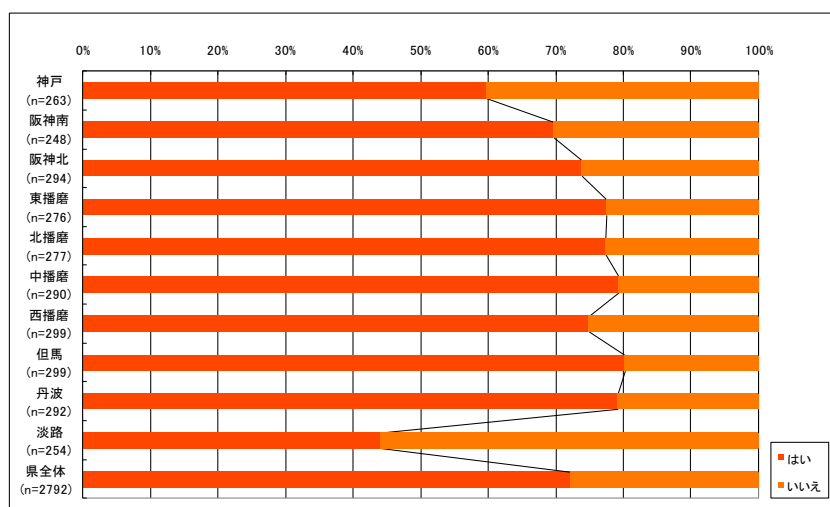
一部、播磨圏域で低いところもありますが、おおむね非都市部で賛成する割合が高くなっています。

地域活動をしていますか



一部、播磨圏域で戸出した地域がありますが、おおむね非都市部で割合が高くなっています。

登下校時の見守りがおこなわれているか



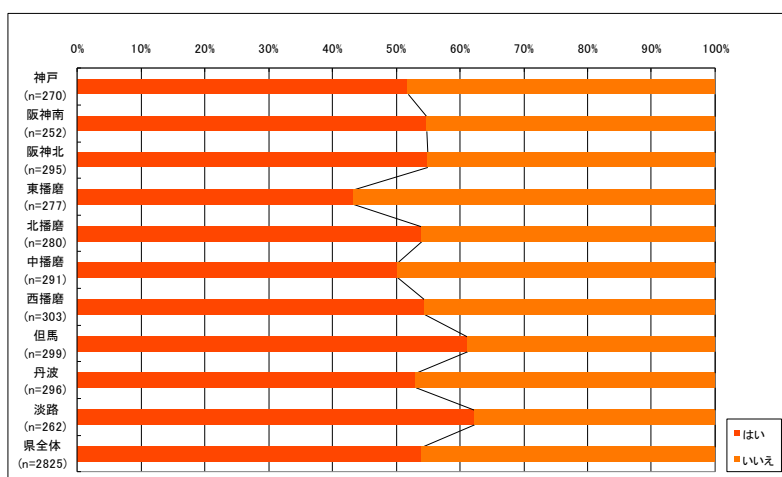
淡路圏域で低くなっているものを除けば、おおむね非都市部で割合が高くなっている。

地域の子どもは伸び伸びと育っている



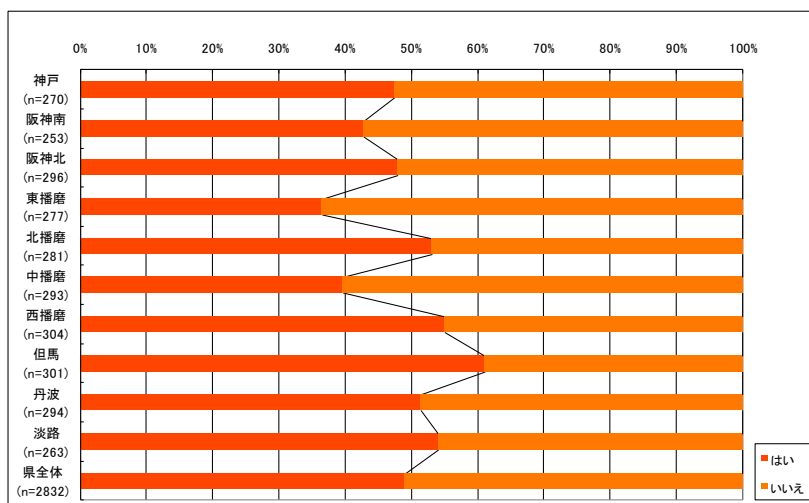
播磨圏域に複数地域で、低い部分があるが、おおむね非都市部で割合が高くなっている。

夜9時以降に地域を安心して歩けますか



一部播磨地域で低くなっていますが、おおむね非都市部で割合が高くなっている。

車の往来を気にせず歩けるか

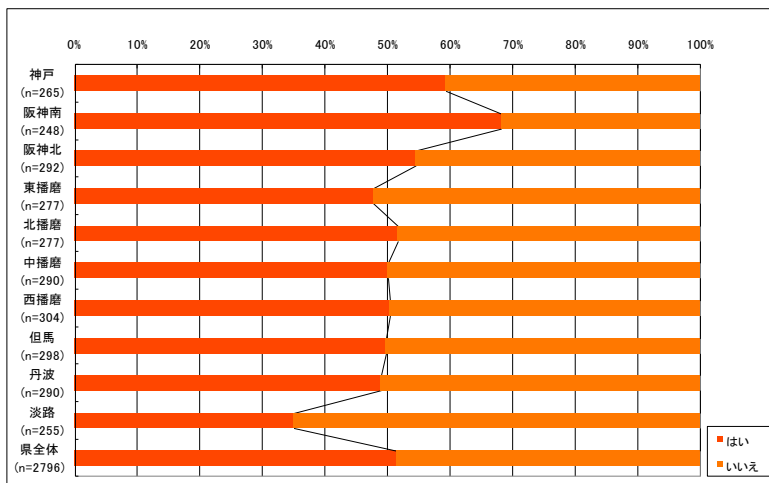


播磨圏域に複数地域で、低い部分があるが、おおむね非都市部で割合が高くなっている。

(10) 都市部で高い

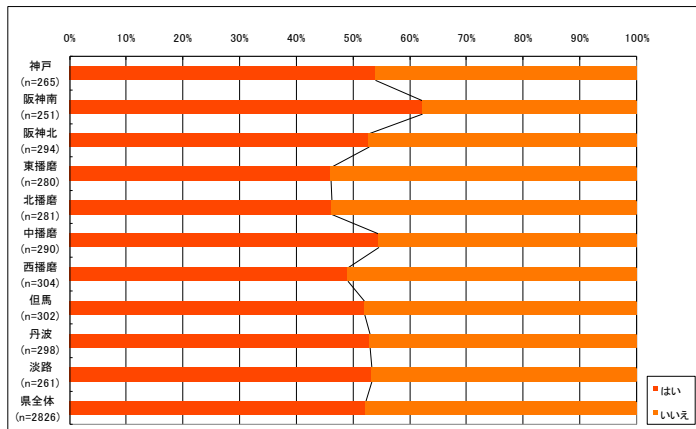
都市部に住んでいる人たちは、「近所に子どもの遊び場がある」、と感じています。このことは、子どもの居場所がどこに分布しているかを示した客観的なデータと調和します。他には、「地域に誇りや愛着を感じる」、「体験学習は子どもの役に立つ」、「地域は、高齢者や障害者にも暮らしやすい」、「住んでいる地域はきれいだと思う」の各項目で、賛成する人の割合が高くなっていました。これらの項目から浮かんでくるのは、建物などのハード面や、仕組みが整っている様子です。まちなみについての積極的評価や、愛着を感じ取ることもできます。

近所に子どもの遊び場があるか



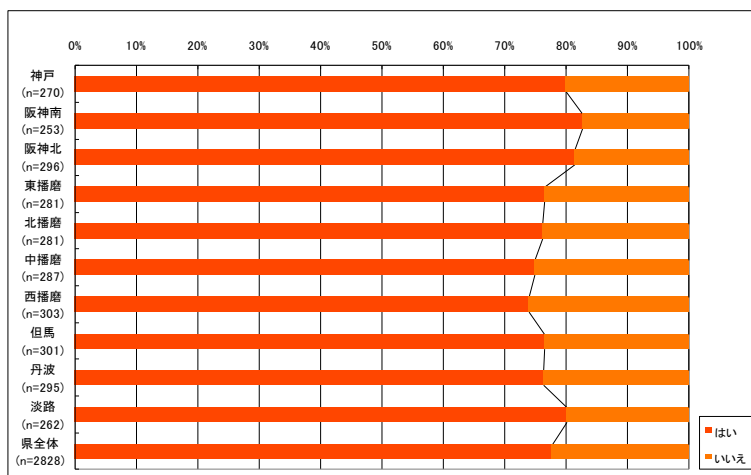
都市部で、割合が高くなっている。

地域に誇りや愛着を感じるか



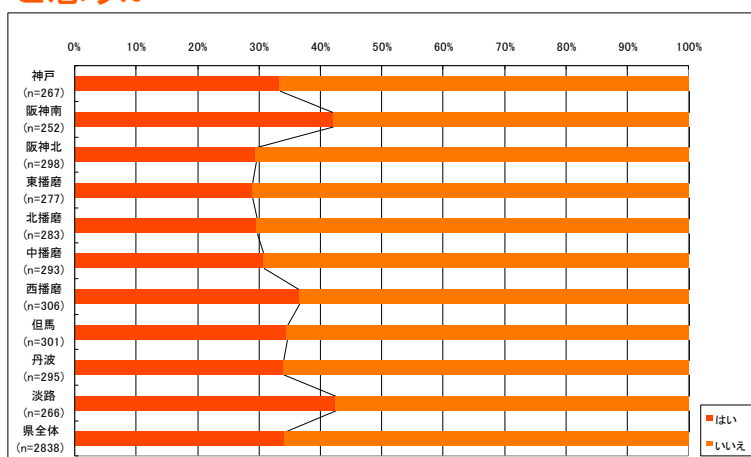
一部、播磨圏域で高くなっているが、おおむね都市部で割合が高くなっている。

体験学習は子どもの成長に役立つ



淡路圏域でも高くなっているが、おおむね都市部で割合が高くなっている。

地域は高齢者や障害者にも暮らしやすいと思うか



淡路圏域でも高くなっているが、おおむね都市部で割合が高くなっている。

住んでいる地域はきれいだと思うか

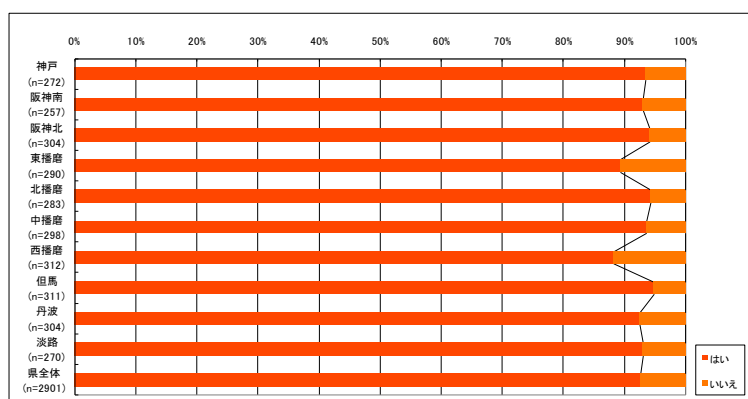


一部、播磨地域で低くなっているが、おおむね都市部の割合が高くなっている。

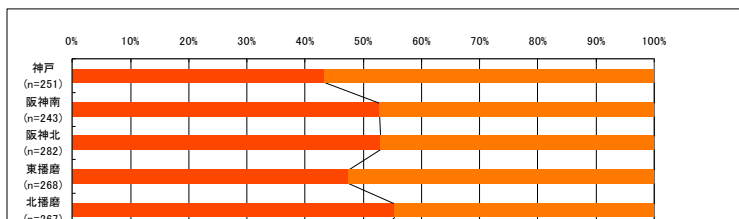
(11)どちらともいえない

このグループは、違いに明確な差がないものです。「リサイクルに協力している」、「地域活動に使ってもよいと思う時間の量」、「地域活動に使ってもよいと思う金額」、という、個人が、行政や地域社会とどのように関わりたいかに関する項目と、「災害に対して地域は安全だと思う」という、地域の安全性についての項目になっています。

リサイクルに協力していますか



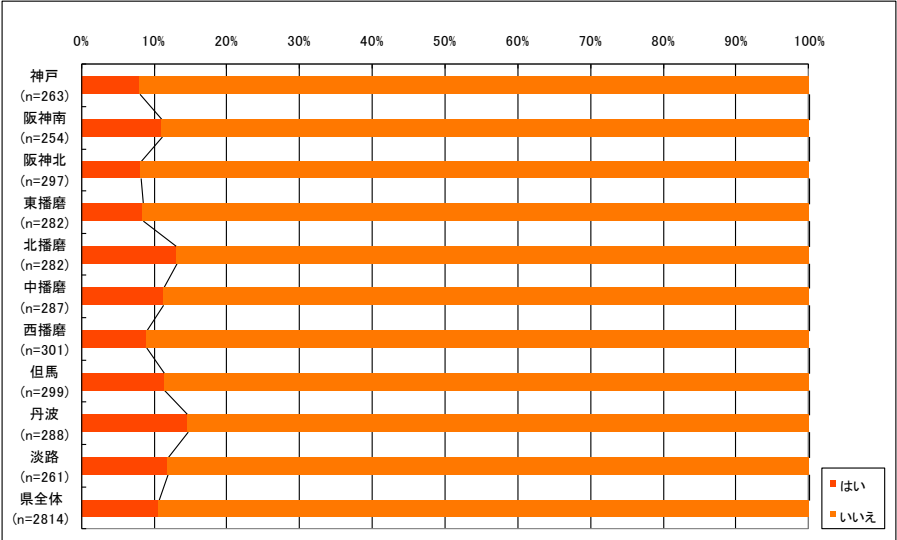
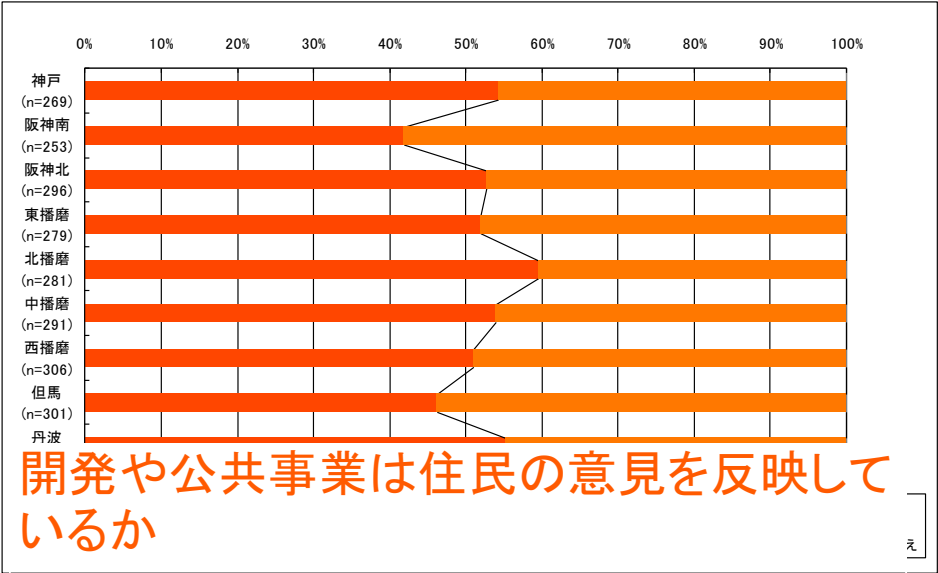
地域活動に使ってもよいと思う時間



地域活動に使ってもよいと思う金額



災害に対して、地域は安全だと思うか



以上のように、項目ごとに見ていくと、名前を把握している地域の大人によって見守られ、子どもがのびのび育っている、と主観的に感じられているのは、兵庫県のなかでは非都市部の地域であることが理解できます。そしてこの感覚は、自らが実際に、地域社会の網の目の中に埋め込まれている感覚に支えられているようです。今後、このような感覚を都市部にも広げていくことは可能なのでしょうか。

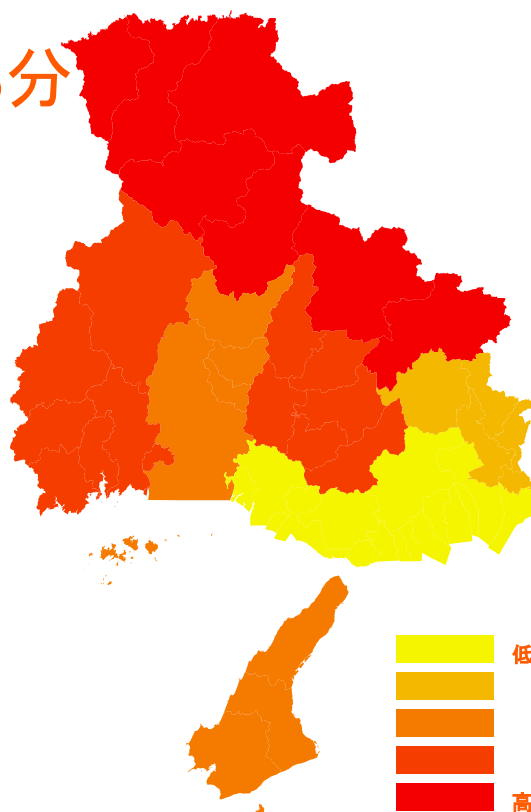
都市部に住む人々は、施設面やまちなみについて積極的に評価しており、愛着を持っています。一方、地域社会での人々のつながりという点は、非都市部に比較して希薄です。しかし、社会関係を持ちたくないと考えているわけでもないようで、公共的な関わりへの態度については、地域で明確な違いはありません。

非都市部の人間関係の密度の高さは、既存の地縁組織を活用しているものと推測できます。そこで、このようなタイプの人間関係を利用しない（できない、が含まれるのかもしれませんが）地域では、新しいつながり方を見つけていく必要があると考えられます。

6. 分析

(1) 地域力の、主観部分

地域力の、主観部分



県民局単位でみたときの、子どものすこやかな育ちに関係すると思われる「地域力」の主観的な部分について、最適尺度法を使って数量化しました。最適尺度法というのは、設問項目どうしの関連を探る方法のひとつです。たとえば「リサイクルに協力していますか」という設問項目に対する回答と「近所に頼れる知り合いはいますか」という設問に対する回答について、似たようなこたえかたを集めてみて、どんなグループができるか調べてみることです。

すると、今回利用した 21 項目すべての項目は、すべてひとつのグループとして「(設問に) 同意」「ほぼ同意」「どちらともいえない」「あまり同意しない」「同意しない」という順番がつけられる、ひとつのグループとして考えてよいことがわかりました。このことは、21 項目の設問が「子どものすこやかな育ちに関する地域力」としてまとめられることを示しています。細かな数値については、別に資料を作成しましたので、ご関心がおありの方は参照してください。

この地図は、「主観的な地域力」が高い圏域ほど、赤く見えるように色を塗っています。場所について調べていたときとは、濃くなっているところが違ってみえます。子どもにとって居心地のいい場所も、ちょっと危ないかもしれない場所も、そのどちらもあまりなかったところで、

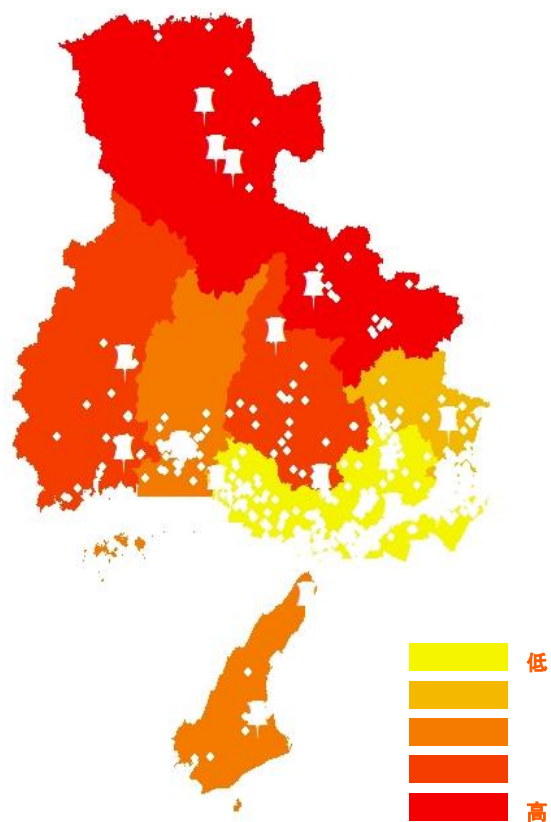
子どもを見守る大人や雰囲気が多くあるという結果になりました。

つまり、兵庫県における「子どもの健やかな育ち」を応援できる場所と人は、どこか特定の地域にだけ偏っているのではなくて、「場所」と「人」が相補的に分布しているという結果になっていると言えます。

この地図に、先に調べていた、子どもにとっての安全で安心な場所を白抜きでプロットしてみます。下の地図が、兵庫県における、子どもの健やかな育ちに資する地域力を数量化し、地図上で可視化した、完成図です。

(2) トータルの地域力

トータルの地域力



このようにみると、主観的な地域力が高く、子どものための施設が点在する但馬圏域および、丹波圏域が、子どもの健やかな育ちという観点からみると、比較的有利な地域になるようです。

7. まとめと提案

以上、兵庫県における、子どもの居場所と健やかな育ちに関する地域力指標について検討をしてきました。最後に、わかったことをまとめておきます。

まとめ

- ハード面の整備は、都市部に偏っている。
 - 同様に「たまり場」になるような小売店等も、道路網に類似する形で分布している
 - NPO団体の分布は、阪神間を中心とする、瀬戸内沿岸地域に集中している
- 古いタイプの「つながり」への依存
 - 播磨地域は「都市」であったり「非都市」であったりする、ゆらぎの地域。
 - 建物はつくることができても、新しいつながりのかたちはまだみえてこない。

客観的な指標については、都市部に偏って分布していることがわかりました。しかし、よくみるとただ単純に阪神間に偏在しているのではなく、子どもの多いところにおおむね立地されていると考えてよさそうでした。

これに対して、主観的な指標については、内陸部を中心とする非都市部で、総合力が高いことがわかりました。これは、客観的な指標の分布を補うようなかたちをとっていることもわかりました。細かくみると、非都市部では既存の地縁組織による社会関係が健在で、人々は現に密接に地域と結びついて生活している様子が浮かび上がってきます。そしてそのことが、子どもの健やかな育ちを地域が応援できている、という主観と関係し

ているようでした。このようなつながりの形は、都市化や人々のライフスタイルの多様化とともに、大きく変化しつつあります。しかし、今回の結果からは、都市部で、新しいつながりの形ができていることを示す項目はみつかりませんでした。今後、非都市部での変化にどのように対応できるかは、政策課題といってよいでしょう。

以上を踏まえて、兵庫県行政のかたがたに、以下の提案をします。主観的な地域力の低下を防ぎ、向上を期待して、子どもの居場所の整備をおこなってほしい、ということがその趣旨です。

提案

- 子どもの居場所については、児童館等既存の施設をつかって機能強化すべき。
 - － 時間帯による棲み分けが可能。
- 一律に施設の設置のみを急ぐのではなく、どのような機能が必要なのかを研究すべき。
 - － 高学年については宝塚市児童センターの取り組みが参考になる。
 - － 子どもの館を事務局に、県内の連絡会が始動しており、今後の横のつながりに期待できる。
- 施設の新しいネットワーク、地域の新しいつながりの創生を

おわりに。



兵庫県は面積が広く気候もさまざまです。よく、「日本の縮図だ」と言われたりします。都会もあれば、たくさん緑に囲まれた場所も多いです。それぞれにいいところがありますが、子どもにとっていちばんいいのは「居心地のいい場所がおうちのすぐそばにあって、周りの大人たちから暖かく見守られる環境」ではないでしょうか。兵庫県の現状は、場所と環境がちょうど、どちらか一方、というちらばりかたになっているようです。とくに、子どもが増えているところや人数の多いところで、子どもたちがどう過ごせるかを考えることは、すぐに取り組むべき、大切なことではないでしょうか。居場所をつくったり環境を整えることは、すぐに出来上がって結果が出る、という種類のものではありませんが、みんなで少しずつ努力することが可能な事柄だと考えます。

共生社会実現のための地域力の指標化

報告書

◆発行

(財)ひょうご震災記念 21 世紀研究機構
研究調査本部 共生社会づくり政策研究群

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通 1 丁目 5 番 2 号

TEL : 078-262-5579 FAX : 078-262-5593

<http://www.hemri21.jp/kenkyusyo/index.html>

平成 22 年 3 月